

小・中学生のジェンダーに関する実態と意識 —家庭科教育の視点から—

堀内かおる¹・村上飛鳥²・大田桃可³

Actual Conditions and Attitudes about Gender among Elementary and Junior High School Students: From the Perspective of Home Economics Education

Kaoru HORIUCHI¹, Asuka MURAKAMI², and Momoka OTA³

1. 問題の所在と本研究の目的

男女共同参画社会基本法の成立(1999年)以来、日本社会では固定的な性別役割分業意識によって、一人一人の多様な生き方の選択が阻まれることのないよう、ジェンダー・バイアスを除去する教育的な取組の重要性が指摘されてきた。家庭科教育においても1989年の学習指導要領改訂によって、中学校技術・家庭科における男女共通履修領域の設定、高等学校家庭科の男女必修化が図られ、小学校高学年から高等学校まで男女ともに必修で学ぶ教科として家庭科は教育課程の中に位置づけられ、今日に至っている。家庭生活に足場を置き、自立と共生に根差した生活を営むことのできる力をつけることを目的とする家庭科の学習は、その内容がいたるところでジェンダーに関わる問題とつながっている。児童生徒は家庭生活に関わる知識の獲得と共に技術を学び技能を習得し、家族の多様性を理解するとともに、幼児や高齢者との触れ合いを通して、地域の中で共に生きる主体としての自己を省察するような学びを重ねている。こうした学習は、自分らしい人生を生きるとはどういうことなのか、という問いに向き合うきっかけとなり、児童生徒にとっての生き方学習としての意味をもたらしてきた。

日本社会の現状をみると、世界経済フォーラム(The World Economic Forum 2021)が公表した2021年のジェンダー・ギャップ指数が156か国中120位と低迷し、アジア諸国の中でも低い順位を示した。この指数は、「経済」「政治」「教育」「健康」の4分野のデータから算出された数値によって、女性の地位を測ろうというものである。日本の場合、女性の政治参画の低さや経済界における管理的立場にある女性比率の低さが影響を及ぼしており、この数値・順位だけで日本のジェンダー問題のすべてに言及はできないということには留意すべきである。しかしそれでも、女性の社会進出という面から見たときに依然として、日本社会にジェンダー・バイアスは残存していることが、この順位から示唆される。

ところで、家庭科教育の観点からジェンダー平等を考えたときにまず想起されるのは、家庭生活への参画実態である。ジェンダー・ギャップ指数には、男性の家事労働時間や育児休業の取得率といった視点は加味されていないが、本来ならば家庭生活における男女共同参画の実態こそ、ジェンダー平

¹ 横浜国立大学教育学部 College of Education, Yokohama National University

² 横浜国立大学教育学研究科大学院高度教育実践専攻(院生) Graduate School of Education, Yokohama National University

³ 横浜市長立東小学校 Azuma Elementary School

等の指標として取り上げられる必要があるのではないか。社会経済への女性進出の裏側で、家庭生活がどのように営まれているのかということは、人々が生きるうえで必要不可欠な要素として注視すべきである。ジェンダー問題について語られる際に、女性に対する差別や女性の社会進出の促進といった視点で取り上げられがちであるが、ジェンダー問題は女性問題とイコールではない。女性はもちろん男性にとってのジェンダー問題も包含し、ダイバーシティの視点も加味し、すべての人が差別されることなく、自分らしい人生を営める状況が保障されているかどうか問われなければならないだろう。その際、特に日本における課題は、男性の家庭への参画状況に見いだされる。

多賀(2019)は、「これまで『標準』とされていた男性のあり方を女性とは異なる仕方でジェンダー化されているものとしてとらえ直す視点」で男性が置かれている状況に光を当てる。男性もまた今日の社会状況において期待されるジェンダー化された存在であることが明らかになり、社会のジェンダー規範それ自体を問う当事者学としての男性学および男性性研究の意義が認められるのである。

家庭科教育の過去を辿れば、かつて女子のみ必修家庭科によって家庭生活の営みを女性的ジェンダー役割と紐づける教育における女性差別があった。これは同時に、男子生徒の家庭生活に関する学びの機会を奪ってきた歴史でもあったという点で男性への差別でもあったといえよう。歴史を振り返り改めて気づかされるのは、家庭科教育の在り方として、男女という性別二分法によって両性を対置的に捉える視点を排除しなければならないということである。性のグラデーションの中で個人がどの地点に位置づくのかに関わらず、生活者としての自己形成を図る際に障害となる様々な事象について、エビデンスをもとに指摘し状況を改善するためにどうしたらよいか、検討する必要があるだろう。

先に述べたような日本社会に残存するジェンダー・バイアスによって、児童生徒が将来の生活設計を考えるうえで、職業選択と共に家庭生活を主体的に担う生活者像を描くためには課題があるのではないだろうか。児童生徒が現在、家庭や学校で日々の生活を送っている中で、男らしさ・女らしさのステレオタイプに縛られ、自分らしい自由な生き方の選択を阻まれるようではあってはならない。本稿では、以上の今日の日本におけるジェンダーをめぐる問題意識から、今後の日本社会を担っていく現在の児童生徒のジェンダー意識と実態について調査し、児童生徒にとって現在ジェンダーがどのように受け止められているのか考察することを目的とした。

2. 本研究の方法

2020年8月から9月に、横浜市立小学校及び中学校の児童生徒を対象として、自記式質問紙調査を実施した。詳細は、表1のとおりである。

表1 質問紙調査の対象者

	男子	女子	未回答	合計(有効回収率)
小学生(第5学年)	138	134	7	279(97.50%)
中学生(第2学年)	275	283	12	570(94.37%)
合計	413	417	19	849(96.03%)

調査項目・内容は、①学校及び家庭での生活の実態とジェンダーに関わる経験、②自分の将来像について、③家庭参画についての三つに大別される。データはIBM SPSS Statistics22を用いて集計・分析するとともに、自由記述についてはテキスト分析に当たり広く活用されているフリーソフトウェア

アである KHCoder を用いて、記述の傾向をとらえた。

なお、本研究者は、男女に二分されるジェンダーを対置させ、両者を区別するという前提で教育をとらえない立場である。しかし、ジェンダー統計が性別による様々な格差や差別の構造をデータとして顕在化させるツールであるように、ジェンダー格差が残存している今日の社会において、あえて「男・女」という性別区分に着目し、実態や意識をとらえる必要があると考えている。この立場から、本研究では調査データの分析において、変数として性別を使用する。

3. 結果及び考察

3-1. 学校及び家庭での生活の実態とジェンダーに関わる経験

3-1-1. 学校生活

表 2 に、児童生徒が学校生活の中で、次に示す行動をどのくらい行っているのかを示した。

小学校・中学校段階共にほとんどの項目で、男女間に有意差が見られた。特に差が大きかったものを見ると、小学校段階では、「授業中に手を挙げて発言する」「みんなの前で先生に注意される行為をする」「自分の机やロッカーが散らかっている」「忘れ物をする」「掃除の時間にふざけてしまう」のは男子のほうが女子よりも行っている傾向が認められ、「図書館で本を借りる」「困っている友達の手助けをする」のは女子が男子より多く行う傾向が認められた。

表 2 学校生活における行動

項目	性別	中学校					小学校				
		よくする	たまにする	あまりしない	しない	有意差	よくする	たまにする	あまりしない	しない	有意差
授業中に手を挙げて発言する	男子	21.9%	39.1%	24.8%	14.2%		30.4%	42.0%	18.8%	8.7%	***
	女子	14.2%	42.9%	24.8%	18.1%		14.2%	38.1%	31.3%	16.4%	
話し合いをまとめる役割をする	男子	12.7%	27.6%	38.2%	21.5%		10.1%	21.0%	42.8%	26.1%	
	女子	11.0%	26.1%	41.0%	21.9%		11.9%	18.7%	38.8%	30.6%	
困っている友達の手助けをする	男子	21.2%	56.2%	18.6%	4.0%	**	30.7%	53.3%	12.4%	3.6%	*
	女子	24.1%	65.6%	8.9%	1.4%		43.6%	48.1%	8.3%	0.0%	
先生に質問をする	男子	21.2%	35.4%	34.7%	48.0%	**	21.5%	45.2%	22.2%	11.1%	
	女子	9.9%	428.0%	38.2%	9.2%		22.6%	36.1%	33.1%	8.3%	
図書館で本を借りる	男子	5.5%	11.3%	26.2%	57.1%	*	12.6%	27.4%	34.8%	25.2%	***
	女子	8.5%	12.8%	33.1%	45.6%		21.6%	38.8%	32.1%	7.5%	
先生に褒められることをする	男子	8.1%	44.7%	33.0%	14.3%	***	9.6%	50.4%	29.6%	10.4%	
	女子	3.6%	43.8%	47.0%	5.7%		15.8%	48.9%	30.8%	4.5%	
みんなの前で先生に注意される行為をする	男子	6.6%	20.2%	38.6%	34.6%	***	7.4%	19.9%	40.4%	32.4%	***
	女子	0.4%	5.3%	35.1%	59.2%		0.0%	6.7%	24.6%	68.7%	
忘れ物をする	男子	14.6%	39.8%	33.9%	11.7%	*	14.7%	44.1%	32.4%	8.8%	**
	女子	7.8%	34.8%	42.6%	14.9%		3.0%	38.8%	42.5%	15.7%	
自分の机やロッカーが散らかっている	男子	13.6%	23.1%	24.9%	38.5%	***	15.2%	18.1%	36.2%	30.4%	***
	女子	6.0%	10.2%	33.2%	50.5%		2.2%	7.5%	22.4%	67.9%	
掃除の時間にふざけてしまう	男子	2.9%	18.5%	36.7%	41.8%	**	2.9%	15.2%	39.9%	42.0%	**
	女子	1.4%	10.6%	32.6%	55.3%		1.5%	6.7%	26.8%	64.9%	

中学校段階では、「授業中に手を挙げて発言する」という割合が男女ともに小学生の頃より減少し男女間の有意差が認められなくなるとともに、小学校段階では有意差の認められなかった「先生に質問する」と「先生に褒められることをする」において、男子の方が有意に女子よりもよく行うという結果となった。そのほかの項目については、小学校段階と同様の傾向を示した。

これらの結果から、「やんちゃな男子としっかり者の女子」というステレオタイプな子ども像が想起されるが、中学校段階において、男子には学習に対する積極性がより認められるようになるという点にも注目したい。

次に、学級や学校内での係・委員会活動における役割について考察する。表3には、児童生徒が次に示す係や委員会の委員をやりたいかどうか尋ねた結果を示した。小学校段階では、男女間で有意差が認められたのは、「クラスの話し合いで書記(記録係)に立候補する」と「図書館や本に関わる係や委員に立候補する」の2項目のみである。いずれも女子のほうが男子よりも「やりたい」と回答する割合が高い。

中学校段階では、小学校段階で男女差のみられた項目に加えて、男女間で有意差の認められた項目が増加し、「保健や健康に関わる係や委員」「情報に関わる係や委員」「生き物の飼育や植物の手入れに関わる委員」は女子のほうが「やりたい」と回答する割合が高く、「クラスの話し合いで司会に立候補する」については、「やりたい」という一部の男子と「やりたくない」と回答する約4割の男子が存在することで、女子とは異なる傾向を示した。

以上を概観すると、係・委員会活動においては、おおむね男子よりも女子のほうが意欲的であり、保健や健康、飼育といった世話をする内容についてはより意欲的であることが分かった。

表3 係や委員会における役割について

項目	性別	中学校				有意差	小学校				有意差
		やりたい	どちらかといえばやりたい	どちらかといえばやりたくない	やりたくない		やりたい	どちらかといえばやりたい	どちらかといえばやりたくない	やりたくない	
クラスの話し合いで司会に立候補する	男子	7.7%	11.0%	41.8%	39.6%	**	15.2%	23.2%	36.2%	25.4%	
	女子	4.3%	20.6%	44.5%	30.6%		15.8%	21.1%	33.1%	30.1%	
クラスの話し合いで書記(記録係)に立候補する	男子	2.2%	11.0%	42.5%	44.3%	***	12.5%	16.9%	36.8%	33.8%	***
	女子	9.9%	28.3%	43.5%	18.4%		31.6%	27.8%	27.1%	13.5%	
学級の代表に立候補する	男子	7.7%	7.7%	37.4%	47.3%		9.6%	17.6%	37.5%	35.3%	
	女子	6.0%	11.7%	40.6%	41.7%		9.8%	21.8%	33.8%	34.6%	
情報に関わる係や委員に立候補する	男子	9.9%	18.1%	37.6%	34.7%	**	10.9%	22.6%	46.7%	19.7%	
	女子	11.3%	23.4%	45.0%	20.2%		11.3%	29.3%	31.6%	27.8%	
保健や健康に関わる係や委員に立候補する	男子	2.2%	18.6%	40.5%	38.7%	***	13.1%	19.7%	46.0%	21.2%	
	女子	6.7%	27.9%	44.9%	20.5%		17.4%	31.8%	35.6%	15.2%	
生き物の飼育、植物の手入れに関わる係や委員に立候補する	男子	8.4%	23.0%	36.9%	31.8%	*	34.1%	23.9%	27.5%	14.5%	
	女子	11.0%	26.1%	41.7%	21.2%		38.3%	33.8%	15.0%	12.8%	
図書室や本に関わる係や委員に立候補する	男子	8.4%	12.7%	40.4%	38.5%	***	20.4%	21.9%	38.7%	19.0%	***
	女子	7.4%	24.7%	23.3%	21.9%		35.9%	38.2%	16.8%	9.2%	
応援団に立候補する	男子	6.9%	11.6%	29.5%	52.0%		19.0%	18.2%	33.6%	29.2%	
	女子	9.5%	16.6%	32.5%	41.3%		21.8%	14.3%	34.6%	29.3%	

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05

3-1-2. 教科に対する意識

表4に、児童生徒の各教科に対する好感度について示した。「好き」および「どちらかと言えば好き」を回答した割合を合計してみると、小学生では家庭科は女子で第1位、男子では第2位である。中学生では、若干順位は下がるものの、男子では第4位、女子では第3位に位置づいており、小学生・中学生共に家庭科に対する好感度は比較的高い。特に小学校では、女子の80.5%が「好き」と回答しており、第5学年から始まる家庭科が特に高い好感度で受け止められていることが分かる。中学校段階では、家庭科の好感度に男女間の有意差は認められなかった。

表4 各教科に対する好感度

		中学校					小学校				
		好き	どちらか と言えば 好き	どちらか と言えば きらい	きらい	有意差	好き	どちらか と言えば 好き	どちらか と言えば きらい	きらい	有意差
国語	男子	15.1%	41.0%	35.8%	8.1%	*	12.4%	40.1%	27.7%	19.7%	*
	女子	18.4%	50.5%	25.8%	5.3%		22.6%	40.6%	28.6%	8.3%	
社会	男子	33.1%	33.5%	22.4%	11.0%	***	30.4%	34.1%	18.8%	16.7%	
	女子	17.4%	31.9%	32.3%	18.4%		22.6%	33.1%	30.8%	13.5%	
数学	男子	34.7%	28.1%	25.9%	11.3%	***	38.2%	25.7%	21.3%	14.7%	
	女子	18.7%	31.8%	29.7%	19.8%		32.6%	31.8%	18.2%	17.4%	
理科	男子	37.4%	30.0%	21.2%	11.4%	***	50.4%	32.8%	15.3%	1.5%	*
	女子	20.9%	38.3%	27.0%	13.8%		42.9%	42.1%	9.0%	6.0%	
音楽	男子	18.7%	35.2%	27.1%	19.0%	***	26.3%	40.9%	19.0%	13.9%	***
	女子	34.6%	36.0%	20.1%	8.5%		54.1%	25.6%	15.0%	5.3%	
美術	男子	15.7%	39.1%	27.4%	17.9%	***	58.7%	26.1%	10.1%	5.1%	
	女子	29.7%	37.5%	23.3%	9.5%		70.5%	20.5%	6.9%	2.3%	
体育	男子	45.4%	31.5%	13.9%	9.2%	***	72.5%	17.4%	5.8%	4.3%	**
	女子	29.3%	27.6%	21.6%	21.6%		54.1%	19.5%	15.0%	11.3%	
家庭科	男子	22.6%	43.4%	25.5%	8.4%		57.2%	31.2%	8.7%	2.9%	***
	女子	19.1%	49.1%	24.7%	7.1%		80.5%	14.3%	3.8%	1.5%	
外国語(英語)	男子	29.3%	28.2%	27.8%	14.7%		28.3%	30.4%	26.1%	15.2%	*
	女子	24.0%	33.2%	24.0%	18.7%		34.6%	41.4%	16.5%	7.5%	

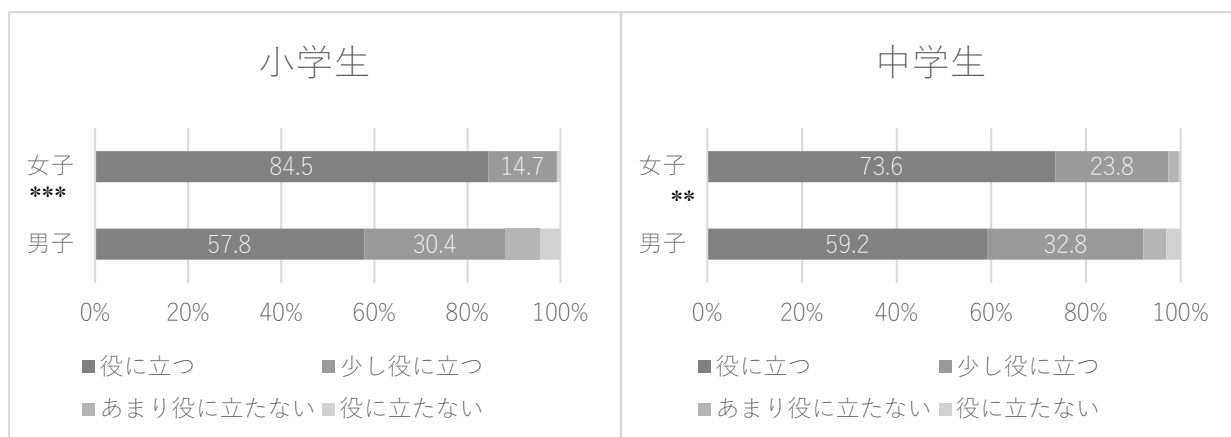
*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05

注)中学校段階において、家庭科は「技術・家庭科(家庭分野)」のことである。

図1に、家庭科に対する役立ち感を示す。小学生・中学生共に、男女間に有意差が認められた。しかし男女とも、約9割以上の者が家庭科は役に立つと考えていた。

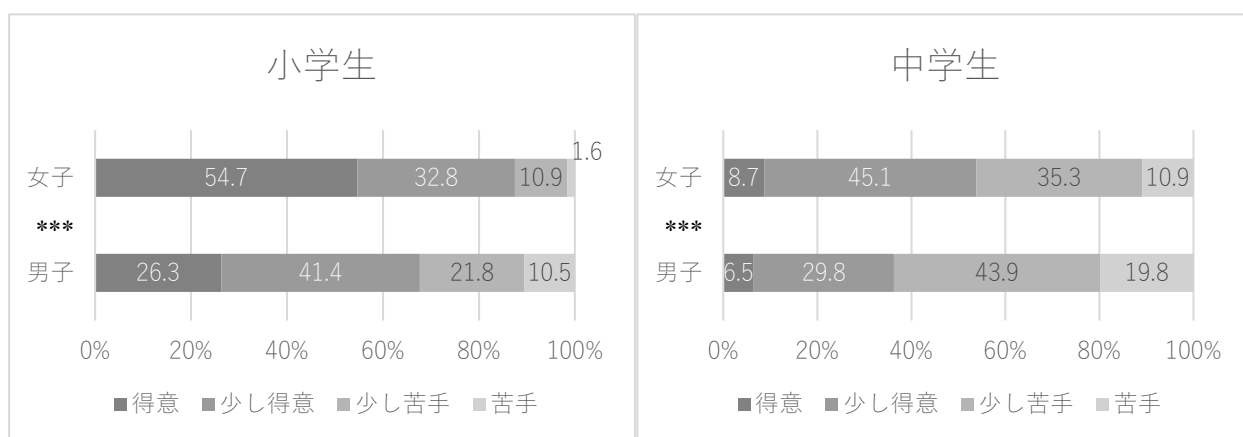
また、家庭科が得意かどうか尋ねたところ、図2に示すような結果が得られた。小学生、中学生共に男女間に有意差が認められ、女子の方が「得意」と回答する割合が高率を示した。中学生になると、男子は「苦手」と回答する割合が6割を上回った。この苦手意識が何に起因するのは本調査からは明らかにすることはできないが、家庭生活に関わる技能・技術に対する意欲も影響

しているのではないだろうか。



*** p<0.001, ** p<0.01

図1 家庭科に対する役立ち感



*** p<0.001

図2 家庭科が得意か

3-1-3. ジェンダーに関わる注意を受けた経験

次に、家族や教師などから、ジェンダーに関わる注意を受けた経験についてみていく。「男の子だから～しなさい」や「女の子だから～してはいけない」といった注意を受けた経験があるか尋ね、その内容について具体的な記述を求めた。表5に示すように、約2割から5割の児童生徒がジェンダーに関わる注意を受けた経験があると回答している。特に中学生女子では約5割の者が、「経験がある」と回答しており、男だから・女だからといった性別を根拠に様々な注意がされていると考えられる。

表5 ジェンダーに関わる注意を受けた経験の有無

		中学校			小学校		
		ある	ない	有意差	ある	ない	有意差
性別に関わって言われた経験の有無	男子	36.5%	63.5%	**	22.7%	77.3%	
	女子	50.7%	49.3%		30.1%	69.9%	

** p<0.01

具体的な注意の内容について、テキストマイニングのフリーソフトであるKHCoderを用いて、分析を行った。小学生60名(男子24、女子35、不明1)、中学生237名(男子93、女子140、不明4)から得られた自由記述を基に、抽出語リストを検出した。そのうえで、上位60語の抽出語を使用し、共起ネットワークを検出したところ、図3に示すようになった。

原点地点から離れるほど、男子および女子に特徴的な関連語が示されている。男子については重い荷物(を持つ)、泣く(な)、殴る(な)、頑張るといった言葉が関連付けられている。原文に戻って確認すると、「男なら泣くな」「男なら我慢なさい」「男なら荷物を持つ」というような、強さや忍耐強さを求める言葉かけがなされていることが分かった。

女子に対しては、言葉遣い、身だしなみといった言葉に関わる内容が繋がっている。具体的な記述をみると、「女の子なんだから汚い言葉を使ってはいけない」「女の子は足を広げて座らない」「食べ方に気をつけなさい」「女らしくしなさい」といった言葉かけがなされていた。

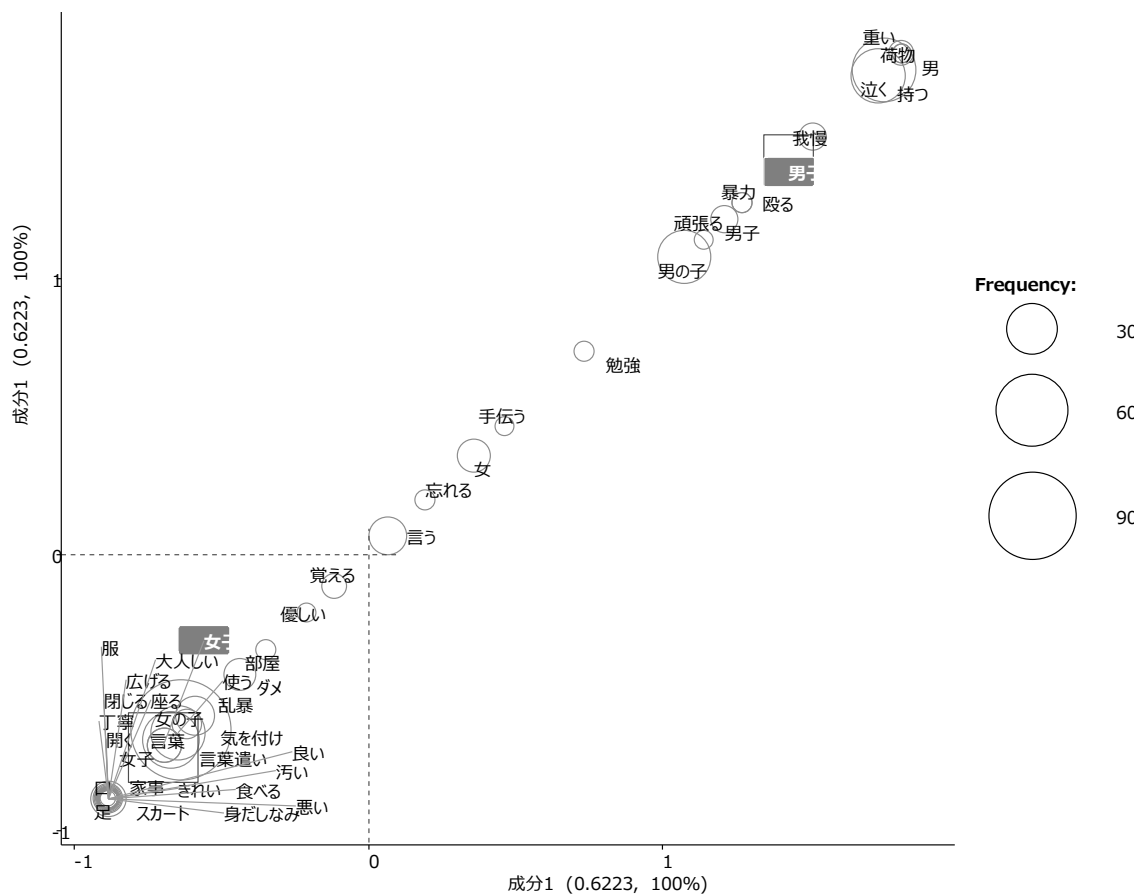


図3 ジェンダーに関する注意についての共起ネットワーク

このような傾向をさらに明らかにするために、これらの男子、女子それぞれに対して特徴的な言葉をコーディングし、対応分析として性別にクロス集計を行った結果を図4に示す。

「男だから」という言葉は男子に、「女だから」という言葉は女子に対して投げかけられていたと同時に、「言葉遣い」「身だしなみ」に関することは女子に対して、「泣くな」「我慢」といった精神面の強さに関する言葉は男子に対して投げかけられ、性別によるジェンダーに関する注意の傾向が明らかになった。これらは旧来のステレオタイプなジェンダー・バイアスに基づく言説であり、今日の児童

生徒に対しても、少なからず「男らしさ」「女らしさ」が求められ、親をはじめとする周囲の大人たちからこのような言葉を投げかけられていることが、本調査の結果から明らかになった。

「男の子は泣いてはいけない」「我慢しろ」という言葉に象徴される「男らしさ」の鎧を着せられることによって、男子児童生徒は感情を抑制することを余儀なくされる。その結果、豊かな感情表現を苦手とし、情緒に乏しいパーソナリティが形成されていくとの指摘もある(アスキュー&ロス、堀内訳 1997)。今日もなお、こうしたジェンダー・バイアスが再生産されていることが示唆される結果となった。

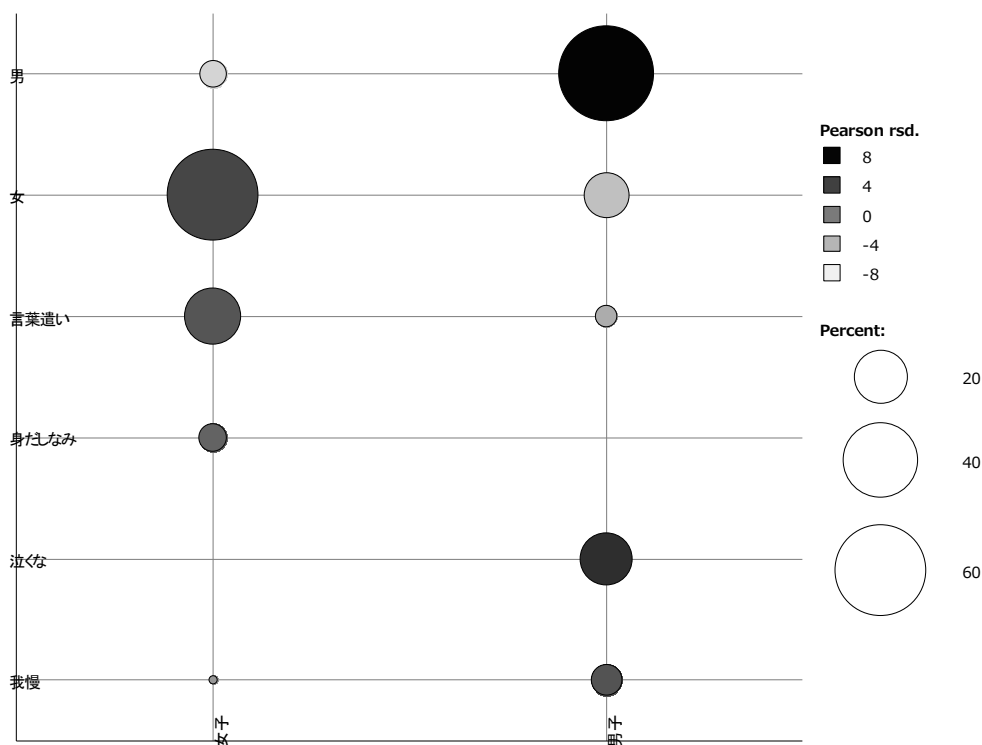


図4 特徴的な言葉に関する対応分析結果

3-2. 自己像について

次に、児童生徒自身が自分のことをどのようにとらえているのか、自己像について検討する。表6に、容姿や性格について自分に当てはまるかどうかを尋ねた結果を示す。

「かわいい」は小学生において、「かっこいい」は中学生において男女間に有意差が認められた。しかし、自分が「かっこいい」に「当てはまる」と回答した割合は、中学生男子で1割に満たない。他方、「かわいい」に「当てはまる」と回答した割合は、小学生女子で16.4%を占める。しかし、「かわいい」に「当てはまる」と回答する中学生女子は5.4%であり、同回答の中学生男子の6.3%を下回っている。女子児童生徒は、「見た目が気になる」に「当てはまる」とする割合が高く、小学校、中学校ともに男女間に有意差が認められた。中学生女子の62.1%がこのように回答しており、「かわいい」と思うかどうかという自己像が中学生で減少していることは、この自分の見た目を気にすることと無関係ではないだろう。「自分に自信がある」に「当てはまる」と回答した割合は、女子中学生16.8%、男子中学生21.9%で男女間に有意差は認められなかったが、自分に自信を持っていない生徒が大部分を占めていることが明らかになった。

小学生の段階では、「自分に自信がある」に「当てはまる」と回答した児童は男子39.7%、女子35.2%

で男女間に有意差が認められ、男子に「自信がある」と明言する者の比率が高かった。男女ともに、この小学校第5学年時の自信が中学校第2学年になると失われてしまう背景に何があるのか、さらなる調査が必要であるが、周囲の目を気にするようになり自己評価も厳しくなっているのかもしれない。

表6 自己像

		中学校				有意差	小学校				有意差
		当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	どちらかと言えば当てはまらない	当てはまらない		当てはまる	どちらかと言えば当てはまる	どちらかと言えば当てはまらない	当てはまらない	
かっこいい	男子	5.1%	3.7%	28.3%	62.9%	**	2.9%	13.9%	29.9%	53.3%	
	女子	1.1%	3.9%	18.6%	76.4%		3.0%	11.3%	24.1%	61.7%	
かわいい	男子	3.7%	2.6%	18.8%	74.9%		1.4%	9.4%	20.3%	68.8%	***
	女子	2.2%	3.2%	20.5%	74.1%		3.7%	12.7%	38.8%	44.8%	
力が強い	男子	7.7%	20.5%	24.5%	47.3%		10.3%	25.0%	34.6%	30.1%	
	女子	2.5%	22.5%	30.0%	45.0%		9.8%	30.1%	31.6%	28.6%	
見た目が気になる	男子	9.2%	25.7%	33.1%	32.0%	***	10.1%	15.9%	34.8%	39.1%	***
	女子	24.6%	37.5%	22.1%	15.7%		18.8%	32.3%	23.3%	25.6%	
自分に自信がある	男子	7.7%	14.2%	38.0%	40.1%		19.1%	20.6%	25.7%	34.6%	*
	女子	2.9%	13.9%	35.0%	48.2%		9.2%	26.0%	38.9%	26.0%	
文句や不満を友達に言える	男子	32.8%	34.3%	17.2%	15.7%		26.1%	34.8%	17.4%	21.7%	
	女子	26.1%	38.6%	23.2%	12.1%		26.3%	29.3%	21.8%	22.6%	
難しいことにも挑戦する	男子	23.7%	34.7%	28.1%	13.5%		30.4%	29.7%	21.7%	18.1%	*
	女子	13.2%	41.3%	35.2%	10.3%		22.6%	44.4%	22.6%	10.5%	
細かなことによく気がつく	男子	20.7%	38.2%	26.5%	14.5%		26.1%	31.9%	21.7%	20.3%	**
	女子	21.4%	42.0%	28.1%	8.5%		37.6%	34.6%	22.6%	5.3%	
他人の気持ちに共感できる	男子	22.6%	46.7%	20.1%	10.6%		24.6%	43.5%	23.9%	8.0%	**
	女子	31.0%	52.3%	13.2%	3.6%		44.4%	36.8%	14.3%	4.5%	
休み時間は一人で過ごす	男子	11.7%	12.0%	29.6%	46.7%		11.0%	9.6%	17.6%	61.8%	*
	女子	9.6%	17.4%	38.1%	34.9%		11.3%	17.3%	27.8%	43.6%	
スポーツが得意	男子	25.0%	28.3%	22.8%	23.9%	*	33.3%	26.8%	18.1%	21.7%	
	女子	13.5%	23.1%	24.2%	39.1%		29.3%	21.1%	24.1%	25.6%	
リーダーシップがある	男子	8.7%	17.8%	30.2%	43.3%		13.8%	15.9%	31.9%	38.4%	
	女子	6.4%	19.6%	33.8%	40.2%		11.3%	24.8%	27.1%	36.8%	
字がきれい	男子	10.2%	11.7%	27.7%	50.4%	***	6.5%	18.8%	27.5%	47.1%	***
	女子	8.5%	25.3%	36.6%	29.9%		21.6%	32.1%	30.6%	15.7%	
整理整頓をよくする	男子	16.4%	22.2%	32.4%	29.1%		15.9%	15.9%	34.8%	33.3%	***
	女子	19.6%	37.4%	27.4%	15.7%		35.8%	31.3%	20.9%	11.9%	

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05

3-3. 自分の将来について

3-3-1. 将来就きたい仕事

次に、児童生徒が将来の職業選択についてどのように考えているのかを見ていく。表7に、将来就きたい仕事の種類について第1位から第3位までを示し、表8にはその仕事に就きたいと思う理由を尋ねた結果を示した。男子の傾向として、小学生、中学生とも「芸術や文化、スポーツに関する仕事(小学生 32.3%、中学生 28.8%)」「ものを作る仕事(小学生 13.1%、中学生 14.4%)」のほかは「その他」の選択も多く分散している。女子については、「芸術や文化、スポーツに関する仕事(小学生 12.9%、中学生 15.5%)」「医療に関わる仕事(小学生 15.9%、中学生 13.0%)」となり、中学生女子では「人の世話をする仕事(14.8%)」が第2位に位置していた。「芸術や文化、スポーツ」という大きなくくりでとらえているために、具体的な内容まで把握することはできないが、男女でそれぞれが指向する種目や内容には、差があるのではないかと推測される。女子児童生徒にとっては、ケア役割を想定した職業選択の兆しが見て取れる。

表7 将来就きたい仕事

		1位		2位		3位	
		中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校
人を世話をする仕事	男子	3.4%	1.5%	2.3%	1.6%	4.7%	2.5%
	女子	14.8%	6.1%	12.5%	13.1%	11.2%	9.6%
人に教える仕事	男子	5.7%	2.3%	9.8%	5.6%	7.4%	5.0%
	女子	6.9%	7.6%	9.6%	6.2%	9.4%	12.8%
医療に関わる仕事	男子	3.0%	5.4%	3.5%	10.5%	7.0%	8.4%
	女子	13.0%	15.9%	10.7%	9.2%	7.5%	8.8%
ものを売る仕事	男子	4.9%	5.4%	11.3%	12.9%	11.7%	10.9%
	女子	7.6%	4.5%	10.3%	10.8%	12.0%	10.4%
ものを作る仕事	男子	14.4%	13.1%	14.1%	13.7%	19.1%	19.3%
	女子	7.9%	8.3%	11.8%	20.0%	10.5%	13.6%
世の中の安全を守る仕事	男子	6.1%	5.4%	7.0%	9.7%	9.8%	7.6%
	女子	1.8%	2.3%	2.2%	0.8%	6.0%	10.4%
農林漁業に関わる仕事	男子	2.7%	3.1%	4.7%	4.0%	2.3%	6.7%
	女子	0.0%	0.0%	0.7%	1.5%	1.9%	2.4%
芸術・文化・スポーツに関わる仕事	男子	28.8%	32.3%	10.9%	8.9%	5.9%	3.4%
	女子	15.5%	12.9%	13.2%	9.2%	9.0%	5.6%
飲食に関わる仕事	男子	5.7%	3.8%	11.3%	11.3%	13.7%	7.6%
	女子	4.7%	3.8%	8.5%	10.0%	10.1%	8.8%
メディアに関わる仕事	男子	2.7%	1.5%	5.9%	1.6%	3.5%	4.2%
	女子	4.7%	4.5%	6.6%	3.8%	7.1%	1.6%
法律に関わる仕事	男子	3.4%	1.5%	5.1%	4.0%	5.5%	8.4%
	女子	0.7%	0.8%	3.3%	3.8%	4.5%	5.6%
専門分野を研究する仕事	男子	5.7%	4.6%	7.4%	8.1%	5.9%	10.1%
	女子	3.2%	3.0%	5.5%	5.4%	6.0%	7.2%
その他	男子	13.6%	20.0%	6.6%	8.1%	3.5%	5.9%
	女子	19.1%	30.3%	5.1%	6.2%	4.9%	3.2%

表8 その仕事に就きたい理由

		1位		2位		3位	
		中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校
その仕事が好きだから	男子	28.5%	32.6%	11.8%	14.7%	8.6%	6.2%
	女子	33.1%	30.2%	14.0%	17.8%	10.9%	8.5%
憧れがあるから	男子	28.1%	26.4%	18.4%	18.6%	11.8%	11.6%
	女子	43.3%	32.6%	25.1%	24.0%	20.7%	20.9%
お金が稼げるから	男子	9.5%	14.7%	15.3%	10.9%	12.9%	17.1%
	女子	9.5%	9.3%	7.7%	6.2%	8.3%	7.0%
他の人の役に立ちたいから	男子	9.1%	13.2%	14.1%	22.5%	12.5%	19.4%
	女子	19.3%	16.3%	22.5%	15.5%	19.5%	27.1%
親がその仕事をしているから	男子	2.0%	2.3%	1.2%	4.7%	5.1%	1.6%
	女子	3.5%	4.7%	2.2%	4.7%	6.0%	7.8%
面白そうだから	男子	27.4%	18.6%	32.2%	24.0%	35.7%	34.1%
	女子	14.9%	14.7%	24.7%	24.0%	32.7%	18.6%
やりがいがあるから	男子	20.2%	20.2%	19.2%	15.5%	21.2%	14.0%
	女子	18.2%	12.4%	23.2%	13.2%	21.4%	14.7%
注目されたいから	男子	3.0%	3.9%	1.6%	3.9%	2.0%	3.1%
	女子	2.2%	0.0%	1.5%	0.0%	0.4%	0.8%
自分に向いていると思うから	男子	17.9%	15.5%	11.4%	12.4%	10.2%	8.5%
	女子	17.1%	22.5%	13.3%	14.0%	13.9%	10.1%
有名になりたいから	男子	0.4%	6.2%	3.9%	1.6%	2.0%	4.7%
	女子	1.8%	1.6%	1.5%	2.3%	0.8%	2.3%
その他	男子	4.6%	7.8%	3.1%	7.0%	2.7%	4.7%
	女子	9.1%	1.6%	4.4%	3.1%	4.5%	3.1%

その仕事に就きたい理由をみると、「その仕事が好きだから」「憧れがあるから」「やりがいがあるから」「自分に向いていると思うから」が上位に並ぶ。女子は「他の人の役に立ちたいから」という理由も上位にある一方で、男子は「面白そうだから」が高率を示し、男女間で相違がみられた。

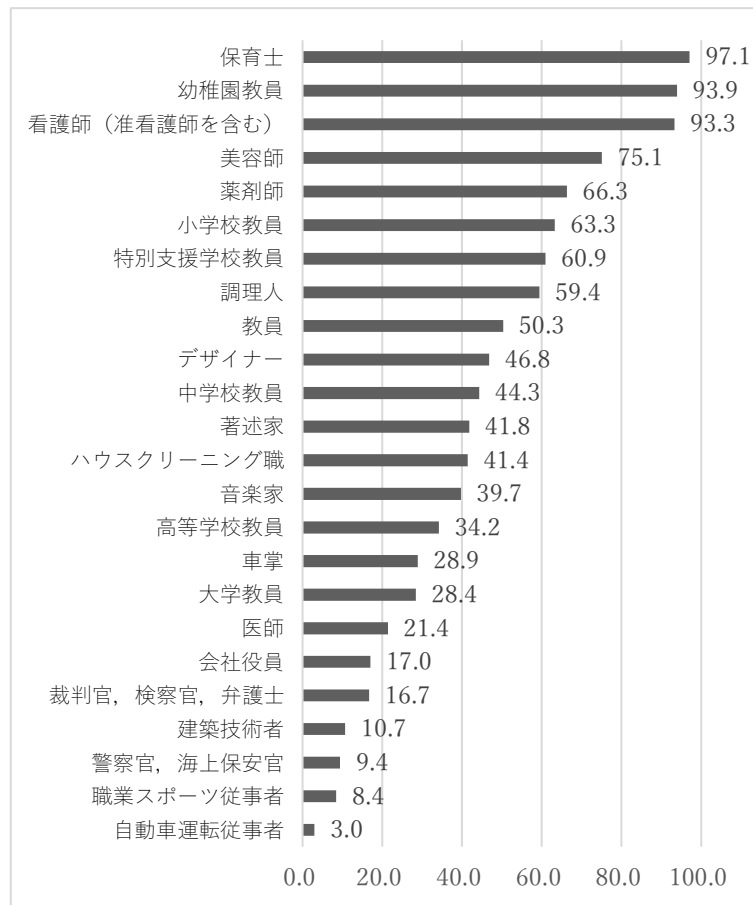
職業には女性比率・男性比率それぞれに偏りのあるものが散見される。児童生徒が職業におけるジェンダー差について、どのような印象を持っているのか、各職業の女性比率がどのくらいだと思うか尋ねた結果を表9に示す。

女性比率の高い職業として、男女とも70%以上が女性と考えているものは看護師のみで、次いでピアニスト、料理人、小学校教師などが挙がっている。これらの職業は、平成27年国勢調査結果(図5)によると実際には、看護師93.3%、音楽家39.7%、料理人(調理人)59.4%、小学校教師63.3%という値を示している。小学校教師については、子どもたちの実感として現状を受け止めているのであろう。ほぼ実態を反映した女性比率が想定されていた。しかし看護師については実際には9割以上が女性であるのに対し、もっと男性が進出していると考えていることが分かった。トラックの運転手についても女性は2割程度存在していると想定されているが、実際には、自動車運転従事者の比率はわずか3%である。児童生徒が思っているよりも、女性の就業状況はジェンダーによる格差が開いている。

以上のことから、児童生徒の実感として、依然として女性比率が高いと考える職業について、一定の傾向はみられるものの、女性は現状よりも社会進出をしていると受け止められていたことは、一つの変化ではなかろうか。今後、キャリア選択の過程で、子どもたちが自分の進路としてステレオタイプなジェンダー規範にとらわれない職業選択が可能となるようになってほしいものである。

表9 職業における女性比率はどのくらいだと思うか(予想)

	性別	中学校	小学校		性別	中学校	小学校
警察官	男子	26.3%	32.1%	弁護士	男子	35.0%	41.4%
	女子	26.8%	32.6%		女子	35.2%	44.2%
医師	男子	36.2%	48.0%	お笑い タレント	男子	36.5%	34.6%
	女子	33.2%	46.0%		女子	39.3%	41.5%
看護師	男子	73.7%	70.6%	漫画家	男子	38.4%	38.8%
	女子	75.2%	70.9%		女子	49.3%	49.1%
小学校の教師	男子	50.1%	60.9%	ピアニスト	男子	64.6%	68.1%
	女子	52.5%	57.5%		女子	63.1%	69.8%
タクシーやバスの運転手	男子	21.2%	20.9%	料理人	男子	51.0%	63.5%
	女子	21.6%	24.4%		女子	48.5%	61.7%
トラックの運転手	男子	15.8%	16.9%	作家	男子	43.9%	42.7%
	女子	17.4%	21.6%		女子	44.9%	49.4%
国会議員	男子	27.6%	33.3%	会社の社長	男子	28.5%	29.1%
	女子	27.1%	33.9%		女子	31.4%	36.2%
消防士	男子	19.6%	21.6%	大学教授	男子	32.4%	39.5%
	女子	17.3%	22.9%		女子	29.9%	45.0%



注)平成27年国勢調査結果より作図

図5 職業における女性比率

3-3-2. 家事労働への参画について

次に、児童生徒が家事労働に関して、どのくらいやりたいと思っているのかを見ていく。ほとんどの項目で男女間に有意差が認められ、女子のほうが男子よりも「やりたい」と回答する割合が高率を示した。この傾向は、小学校第5学年で顕著に表れている。第5学年で家庭科が始まって間もない時期に実施した調査であることを勘案すると、家庭の仕事に関心を持ち、できるようになりたいという意識の高まりの表れであるとも考えられる。特に、小学生女子で「食事を作る」ことをやりたいと回答しているのは69.4%にも及ぶ。「少しやりたい」という回答も含めると96.3%の女子児童が料理を

表10 家事労働への参画意欲

		中学校					小学校				
		やりたい	少し やりたい	あまりやり たくない	やりたく ない	有意差	やりたい	少し やりたい	あまりやり たくない	やりたく ない	有意差
食事の材料を買いに行く	男子	14.2%	28.4%	41.5%	16.0%	***	22.5%	43.5%	23.6%	9.4%	***
	女子	31.2%	34.0%	27.3%	7.4%		52.2%	29.1%	16.4%	2.2%	
食事を作る	男子	20.7%	35.6%	29.1%	14.5%	***	44.9%	33.3%	13.8%	8.0%	***
	女子	36.5%	38.3%	19.1%	6.0%		69.4%	26.9%	3.0%	0.7%	
食器を準備する	男子	19.3%	29.1%	37.5%	14.2%	***	24.6%	42.0%	22.5%	10.9%	***
	女子	24.8%	38.7%	30.5%	6.0%		49.3%	31.3%	14.9%	4.5%	
使った食器を洗う	男子	14.3%	22.0%	43.6%	20.1%		26.3%	32.1%	26.3%	15.3%	***
	女子	18.5%	26.0%	41.3%	14.2%		49.3%	24.6%	20.1%	6.0%	
洋服を洗濯する	男子	11.3%	21.5%	45.3%	21.9%	**	16.1%	32.1%	32.8%	19.0%	***
	女子	16.7%	27.8%	44.8%	10.7%		42.9%	27.8%	21.1%	8.3%	
洋服を干す	男子	11.7%	22.6%	43.4%	22.3%	**	20.3%	28.3%	31.2%	20.3%	***
	女子	18.8%	25.5%	43.6%	12.1%		46.6%	27.1%	20.3%	6.0%	
洋服を畳んでしまう	男子	12.7%	25.2%	42.0%	21.2%		21.2%	29.9%	32.8%	16.1%	***
	女子	21.3%	30.5%	33.7%	14.5%		45.1%	24.1%	24.1%	6.8%	
アイロンがけをする	男子	9.1%	14.2%	50.7%	25.9%	***	19.4%	17.9%	35.8%	26.9%	***
	女子	17.9%	25.0%	43.2%	13.9%		40.2%	25.0%	21.2%	13.6%	
自分の部屋を掃除する	男子	28.9%	32.2%	23.1%	15.8%	*	28.3%	31.9%	22.5%	17.4%	**
	女子	38.4%	32.0%	20.3%	9.3%		46.9%	25.4%	20.0%	7.7%	
トイレやお風呂を掃除する	男子	12.4%	23.6%	38.9%	25.1%		19.6%	33.3%	26.1%	21.0%	*
	女子	13.8%	19.9%	44.7%	21.6%		36.1%	24.8%	23.3%	15.8%	
廊下やリビングを掃除する	男子	12.1%	29.7%	40.7%	17.6%	*	17.5%	36.5%	24.8%	21.2%	***
	女子	20.1%	27.2%	41.7%	11.0%		36.4%	5.8%	19.7%	8.3%	
ゴミ出しをする	男子	16.5%	24.2%	37.0%	22.3%		22.6%	32.1%	26.3%	19.0%	
	女子	14.1%	25.1%	41.3%	19.4%		33.8%	30.8%	21.8%	13.5%	
自分が出したものを片付ける	男子	26.8%	33.8%	27.9%	11.4%		29.2%	31.4%	21.9%	17.5%	*
	女子	34.4%	33.0%	24.5%	8.2%		47.3%	27.5%	18.3%	6.9%	
他の人が出したものを片付ける	男子	10.5%	19.3%	38.9%	31.3%		13.1%	21.9%	29.9%	35.0%	*
	女子	11.4%	20.6%	42.7%	25.3%		27.1%	21.1%	31.6%	20.3%	
トイレの手拭きタオルを変える	男子	12.7%	21.8%	44.7%	20.7%	*	9.6%	22.8%	41.9%	25.7%	***
	女子	19.6%	28.1%	37.4%	14.9%		34.8%	25.0%	25.0%	15.2%	
日用品を買いに行く	男子	15.0%	23.0%	40.9%	2.4%	***	30.9%	24.3%	25.0%	19.9%	***
	女子	31.2%	32.3%	24.8%	11.7%		49.6%	28.6%	14.3%	7.5%	

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05

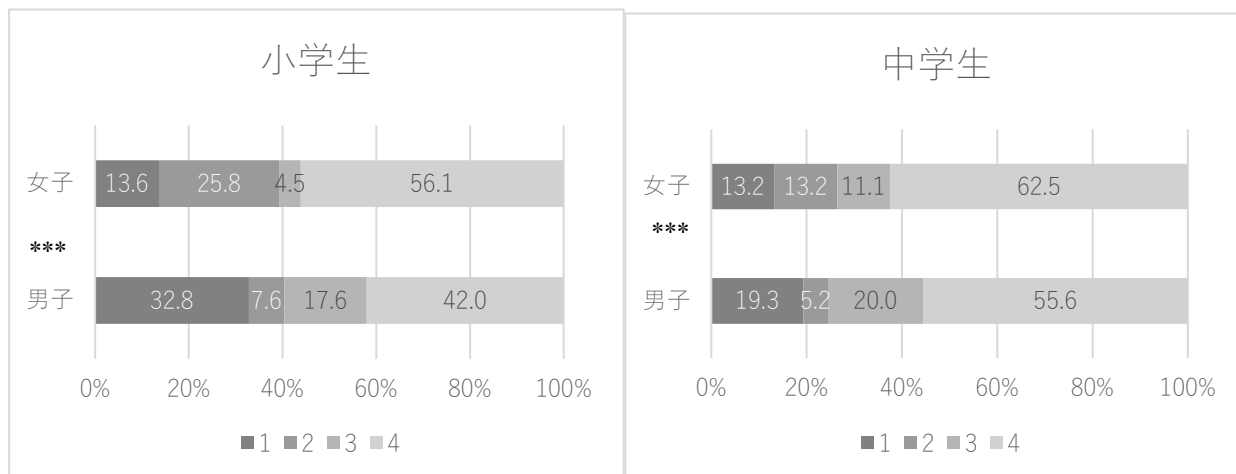
作りたいと思っている一方で、小学生男子では78.2%である。男子においても高率を示しているとはいえ、100%近い女子児童が食事を作りたいと回答している状況の背景に、どのような意識が働いているのか、さらに考察する必要性が認められる。

中学生になると全体的に「やりたい」という割合は減少する。それでも、「食事を作る」に関しては、女子の74.8%が「やりたい」と回答しており突出している。「やりたい」と思うことと実際に「やっている」ことは異なるとはいえ、女子児童生徒の中に、特にこうした家事労働を「やるべきこと」ととらえる意識が働いているのだとしたら、それはジェンダー規範がもたらす影響とも考えられよう。

3-3-3. 理想とする生活

児童生徒が考える将来の理想とする生活について、尋ねた結果を図6に示す。

「仕事を中心とする生活」「家事や育児を中心とする生活」「地域での活動や趣味を中心とする生活」「仕事も家事や育児も、趣味もすべて行うような生活」の4択で尋ねたところ、小学生・中学生、男女ともに最も支持されたのは、「仕事も家事や育児も、趣味もすべて行うような生活」であった。小学生男子を除き、過半数がこのオールラウンドに力を注ぐ生活様式を最善と考えていた。しかし、小学生男子は、「仕事を中心とする生活」を選択するものが32.8%で比較的高率を示した。この傾向は、中学生男子になると減少する。同様の傾向は小学生女子の「家事や育児を中心とする生活」への支持にもうかがわれる。小学校第5学年の段階では、男女ともに、性別役割分業に基づく生活様式を前提とする傾向も潜在化しているのではないかと推察される。それが中学生になるにつれ、視野の広がりとともに多様なライフスタイルを考えることができるようになるのではないだろうか。



*** p<0.001

注)

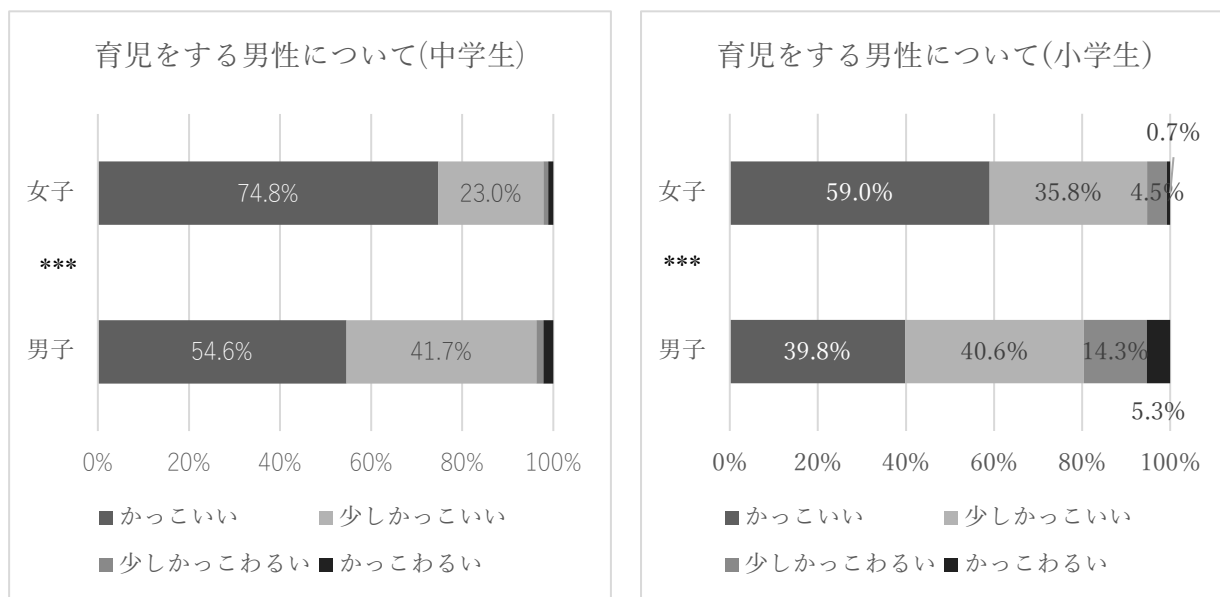
1. 仕事を中心とする生活、2. 家事や育児を中心とする生活、3. 地域での活動や趣味を中心とする生活
4. 仕事も家事や育児も、趣味もすべて行うような生活

図6 理想とする生活

3-4. 男性の家事・育児参加について

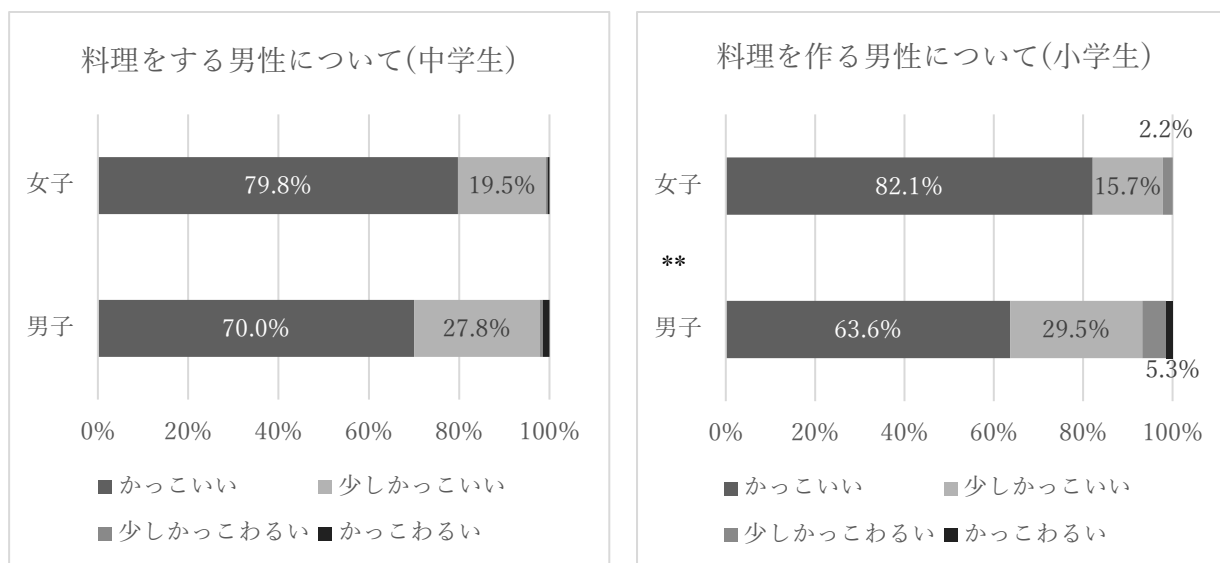
次に、男性が育児をする、あるいは料理をすることについて、児童生徒が「カッコいい」と思うかどうか尋ねた。「カッコいい」という言葉は、憧れや肯定的感情が端的に表現されていると考え、この質問をした。結果を図7と図8に示す。

男女間の有意差は、育児については小学生・中学生共に認められ、料理については小学生のみに認められた。これらの内容においては、女子のほうが男子よりも、「男性が行うこと」に対して「カッコいい」と感じる比率が高い。「少しかっこいい」まで含めると、育児・料理共に約95%以上の女子が「カッコいい」と感じており、受容されている。男子の比率は女子より低いとはいえ、育児については中学生男子の5割を上回る者が育児を男性が行うことを「カッコいい」と明確に回答していることは、自分たち男性にとっての育児というものを身近に感じているのではないかと推察される。



*** p<0.001

図7 育児をする男性は「カッコいい」か



** p<0.05

図8 料理をする男性は「カッコいい」か

また、中学生で料理をする男性に対して男女間に有意差が認められず、「少し」まで含めると 100%に近い比率で男性の参画を「かっこいい」とみなしていたことは、注目すべきである。日常的な家事労働の代表格と言える料理について、「かっこいい」という肯定的なとらえ方がなされていたことは、料理をするということに対し、前向きに取り組もうとする意欲にもつながっていくことを期待したい。

4. 結論

児童生徒のジェンダーに関わる実態と意識について、学校生活と家庭生活の側面から質問紙調査の結果をもとに考察してきた。本研究から明らかになったことは、子どもたちを取り巻く学校や家庭といった環境の中には、今でもジェンダー規範に関わるバイアスが残っており、それを伝えている周囲の大人たちの存在がある。「男だから」「女だから」といった言葉かけとともに、男子児童生徒に対しては「泣くんじゃない」「強くあれ」「我慢しろ」といったメッセージが伝えられ、女子児童生徒にとっては「身なりを整えろ」「おとなしく礼儀正しくあれ」といったメッセージが伝えられていた。これらは、子どもたちの周囲の大人たちが投げかけている言葉である。子どもたちはこういった言葉に触れながら、反発しつつもステレオタイプな女子像・男子像を内面化する可能性がある。

学校の係活動への取り組みにおいては、小学校段階ではほとんど男女間の有意差は認められなかった。中学校段階になると、保健や飼育に関する係を「やりたい」と思う女子と、「やりたくない」と思う男子という傾向が見て取れた。また、家事労働をやりたいと思うかどうか尋ねた結果、女子のほうが総じて意欲を示した。

職業選択に関しても、女子児童生徒はケア役割につながる職業を指向し、男子児童生徒はスポーツやものづくりを指向するなど、ジェンダー差は散見された。しかし、職業における男女格差については、様々な職業において児童生徒は現実よりも格差が少ないととらえていることも分かった。

さらに将来の理想の生活として、「仕事も家事や育児も、趣味もすべて行うような生活」を挙げる児童生徒が最も高率を示したことに注目したい。ワーク・ライフ・バランスを当たり前のことと考え、自分の人生をトータルに考えようという意識が表れていると考える。

そして、児童生徒は家庭科への好感度が高く、家庭科は役に立つと見なしていた。この家庭科に対する肯定的な意識が、家庭生活について学ぶ意欲につながり、学んだことを家庭での実践につなげていくことによって、将来的に家事労働や育児への参画を当たり前のこととみなし、実践するようになっていくのではないだろうか。家庭科教育の効果は、学習したのちに時間を経て、自分自身が家庭生活を創っていく立場になったときに再認識されるものである。ジェンダー・バイアスを超えて、自分事として家庭生活や職業生活を見つめる契機となる学びを積み重ねるような、家庭科教育の在り方を追究していきたい。

引用文献

多賀太(2019)「男性学・男性性研究の視点と方法：ジェンダーポリティクスと理論的射程の拡張」

『国際ジェンダー学会誌』17, 8-28, <http://doi.org/10.32286/00023841>

2021年9月20日アクセス

The World Economic Forum (2021) *Global Gender Gap Report 2021 INSIGHT REPORT MARCH 2021*

WEF_GGGR_2021.pdf (weforum.org) 2021年9月5日アクセス

スー・アスキュー&キャロル・ロス、堀内かおる訳(1997)『男の子は泣かない—学校で作られる男らしさとジェンダー差別解消プログラム』金子書房